

香取市山中遺跡

— 地域活力基盤創造交付金埋蔵文化財調査報告書 —

平成22年2月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

カトリ ヤマナカ
香取市山中遺跡

— 地域活力基盤創造交付金埋蔵文化財調査報告書 —





1 墨書（蓮、真）



3 「真」



4 墨書（記号）



5 墨書（文字）



2 「蓮」

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第640集として、千葉県県土整備部の地域活力基盤創造交付金委託に伴って実施した香取市山中遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡から蓮の花を模写したと思われる墨書き土器が出土し、当時の一般民衆における仏教思想受容の証拠として、貴重な資料を提供できたものと思われます。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成22年2月

財団法人千葉県教育振興財団

理事長 篠塚俊夫

凡　　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による県道114号八日市場山田線（地域活力基盤創造交付金委託）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は
千葉県香取市小川1018-1 ほかに所在する山中遺跡（遺跡コード236-003）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、（財）千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 本書の執筆は、主席研究員兼副所長相京邦彦が担当した。
- 5 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、香取市教育委員会、千葉県県土整備部香取地域整備センターの御指導・御協力を得た。また、墨書き面に関しては千葉県教育庁文化財課植野英夫氏の教示を得た。
- 6 発掘調査及び整理作業は調査研究部長及川淳一、北部調査事務所長野口行雄の指導のもと、発掘調査を上席研究員内山健、整理作業を主席研究員兼副所長相京邦彦が下記の期間に実施した。
発掘作業 平成21年8月1日～平成21年8月31日
整理作業 平成21年9月1日～平成21年10月31日
- 7 本編で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/50,000 地形図 「八日市場」(N I -54-19-6)
第2図 千葉県県土整備部香取地域整備センター作成 1/2,000 路線図を纏集
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成15年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値については日本測地系を使用した。
- 10 本書で使用した遺構番号は、調査時の番号を踏襲した。図面等における記号等の用例は本文中に掲載した。赤彩・内黒処理の土器はスクリーントーンを使用して表示した。赤彩はNo.111、黒色処理はNo.61を使用した。須恵器は断面に墨入れをし、遺構の火焼部はNo.320を使用した。
- 11 遺物の色調については、農林水産省、（財）日本色彩研究所監修、日本色研事業株式会社発行「新版標準土色帖」1988年掲載の用語を使用した。
- 12 本編で使用した遺構の略称は以下のとおりである。

S I : 住居 S D : 溝 S K : 土坑 S H : ピット群

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 遺跡の位置と周辺の環境.....	1
第3節 調査の方法と経過.....	5
第4節 基本層序.....	6
第2章 検出された遺構と遺物.....	7
第1節 概要.....	7
第2節 検出した遺構.....	7
第3節 出土遺物.....	13
第3章 まとめ.....	17
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 周辺地形と主な遺跡.....	2
第2図 遺構分布図とグリット名称.....	4
第3図 下層確認グリット位置図.....	5
第4図 下層土層柱状図.....	6
第5図 SI001・SI002・SI003・SI004.....	8
第6図 SI005・SI006・SI007	10
第7図 SH001・SH002・SH003・SH003 ・SK001・SK002.....	12
第8図 出土土器.....	14
第9図 出土土器・石製品・鉄製品.....	15
第10図 墓書集成「蓮」「つぼみ」.....	18

表目次

表1表 遺構一覧.....	7
第2表 出土遺物観察表.....	16
表3表 「蓮」墓書一覧.....	17

図版目次

卷頭図版 墓書土器	S I 0 0 4 (土層断面) S I 0 0 2 (全景)
図版1 周辺航空写真	図版5 S I 0 0 3 · 0 0 4 (全景西から) S I 0 0 3 · 0 0 4 (全景東から)
図版2 調査前近景 東から 調査前近景 西から	図版6 S I 0 0 4 (遺物出土状況) S I 0 0 5 (全景) カマド (全景)
図版3 調査終了後 東側から 調査終了後 西側から	図版7 S I 0 0 6 (全景) S I 0 0 7 (全景)
図版4 S I 0 0 1 (全景) S I 0 0 1 (カマド全景)	

图版8 SH001 (全景·SD001)
SH002 (全景)
图版9 SH003 (全景)
SK001 (全景)
SK001 (遗物出土状况)

SK002 (全景)
下层土层断面
图版10 出土遗物(1)
图版11 出土遗物(2)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

千葉県の北東部に位置する香取地域及び海匝地域では、高速道路・有料道路・広域農道をはじめとした道路網の整備が進められている。しかし、この地域に特徴の樹支状に発達した支谷によって複雑に形成された台地上奥部の道路網については、未だ整備が遅れているのが現状である。

そのような中で、千葉県県土整備部及び香取地域整備センターは県道114号線の道路整備を計画した。八日市場山田線（県道114号八日市場山田線）は、匝瑳市から香取市小見で県道28号旭小見川線までを結ぶ県道で、調査はまず香取市小川1018-1地先がその候補地となり、予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査を実施したところ、事業予定地内が奈良・平安時代の包蔵地であることを確認し、その旨を回答した。

この回答を受け、その取り扱いについて関係機関と慎重に協議を続けた結果、事業の性格上やむをえず記録保存の措置をとることになり、千葉県教育振興財團が発掘調査を実施することとなった。

今回報告する山中遺跡の調査面積は以下の通りである。

発掘対象面積	460 m ²
上層 確認調査	302 m ² / 460 m ²
本 調 査	265 m ² / 460 m ²
下層 確認調査	10 m ² / 460 m ²
本 調 査	0 m ² / 460 m ²

第2節 遺跡の位置と周辺の環境（第1・2図）

山中遺跡は香取市小川地先に所在する。現在の香取市小川は旧香取郡山田町字小川で、平成18年3月27日に、佐原市、香取郡小見川町、山田町、栗源町が合併して「香取市」が誕生し、現在の地名になった。

本地域は、栗山川水系に属する傍当川水系の支流である八反田川からさらに台地に入る小支流と、椿海から派生した樹支状谷に挟まれた複雑な地形を呈している支谷の東岸に所在している。標高は約40mである。

山中遺跡¹⁾の南側の小谷を挟んで南西約700mには(財)香取都市文化財センターが調査した向仲野遺跡²⁾が所在し、古墳1基、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒、古墳時代の土坑9基が検出調査され、土師器、須恵器、刀子、軽石が出土している。南方1kmには、銅碗、馬具等を出土した古墳時代終末期に比定される閑向古墳³⁾がある。一方、山中遺跡の南方約1.5kmには大寺廃寺⁴⁾が所在している。大寺廃寺は房総地域における古代寺院の一つとして知られており、山中遺跡においてもその関連成果が期待されていた。大寺廃寺は8世紀中頃の創建とされ、軒丸瓦、素文縁八葉素弁蓮華文瓦、三重圓縁八葉單弁蓮華文瓦、六弁連華文瓦、素文縁十六葉單弁蓮華文瓦などが出土している。大寺廃寺跡から出土した瓦の素文縁十六葉蓮華文の軒平瓦は、茨城県信太郡下君山廃寺跡出土のものに類似しているという。大寺廃寺のすぐ西側には伝金光寺廃寺⁵⁾が所在する。また、大寺廃寺の北側には大寺出羽遺跡⁶⁾があり、平安時代の堅穴住居跡と溝状造構が調査され、「大」の墨書き文字が出土しており、大寺廃寺と大寺出羽遺跡はひとつの大きな遺跡であ



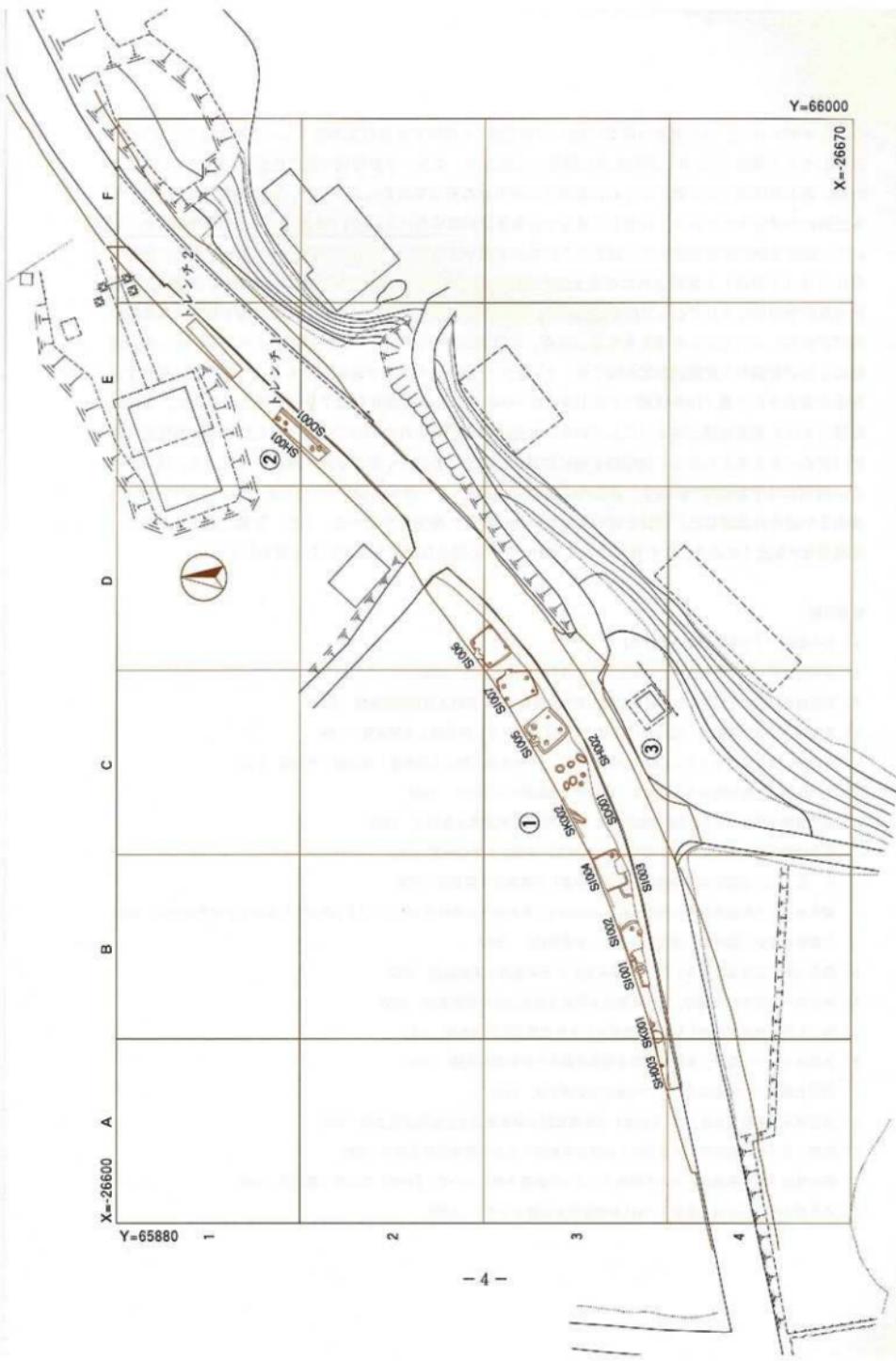
第1図 周辺地形と主な遺跡

ることが伺われる。山中遺跡の南東1.2kmには御堂跡¹⁾と呼ばれる布目瓦の出土した遺跡が所在している。近接して大寺遺跡²⁾があり、昭和52年に調査が実施され、奈良・平安時代の堅穴住居跡13軒などが調査された。導水路建設による調査のために面的な広がりは確認出来なかった。また、旧山田町萱付遺跡³⁾でも住居跡が調査されており、台地上に展開する集落群が推定される。南1.5kmには飯塚遺跡群⁴⁾が所在している。飯塚遺跡群は昭和55年から調査をされており雉子ノ谷遺跡、真々坂遺跡、小山遺跡がある。柳台遺跡からは「千校尉」と記載された墨書き土器⁵⁾が採集されている。「校尉」は701年から792年の間に、大宝律令軍防令が施行されてから軍團が廃止され、健児の制へ移行する間に実施された軍制であり、この地に軍團が所在していたことが考えられる。また、「王口私印」の青銅印や和同開珎が出土している。柳台遺跡は7世紀初頭から集落が営まれはじめ、8世紀から9世紀の中頃が最盛期である。その東には豊富な副葬品が調査された鷺ノ山横穴墓⁶⁾や丸山横穴群⁷⁾がある。これら横穴群は7世紀初頭と推定され、飯塚遺跡群における集落展開と時を一にしている。大寺廃寺が造営されたのはこのような在地勢力の財政的な裏付けがあったと考えられる。南西約3kmには八辺窯跡⁸⁾が所在し、須恵器窯が確認されている。南東4kmの沖積地には平木遺跡⁹⁾があり、多量の墨書き土器が出土し、「郡衙」「廳(庁)」「厨」の文字が見られる。既あるいはそれに準じた、郡衙と深い関わりを持つ遺跡と推定されている。また、延喜式内小社とされる老尾神社¹⁰⁾も近くにあり、この地域は古代において中心的な位置を呈していたと思われる。

参考文献

- 1) 山中遺跡 「千葉県遺跡分布地図」
- 2) 向仲野遺跡 (財)香取都市文化財センター調査報告書第55集 1999
- 3) 安藤鴻基ほか「千葉県八日市場市向古墳発掘調査概報」向古墳発掘調査団 1975
- 4) 藤崎四郎「房総の寺址」「房総郷土史研究」第1巻第7巻 房総郷土史研究会 1934
平野元三郎・渡口宏「上代仏教遺跡調査予報」「史蹟名勝天然記念物調査」第14輯 千葉県 1937
- 5) 大野政治「下総国龍角寺・龍腹寺・龍尾寺三山縁起について」 1967
- 6) 高木博彦「房総の古瓦」「展示図録」No.4 千葉県立房総風土記の丘 1978
- 7) 安藤鴻基「房総七世纪史の一姿相」「古代探求」早稲田大学出版部 1980
- 8) 谷 旬「八日市場大寺廃寺跡確認調査報告書」千葉県教育委員会 1990
- 9) 畑本東三「下総龍角寺の山田寺式軒瓦についてーその分布の意味するものー」「千葉史学」第22号千葉歴史学会 1993
- 10) 千葉県の歴史 資料編 古考3 (奈良・平安時代) 1998
- 5) 西山太郎「伝金光寺廃寺」「八日市場市史」八日市場市市史編纂室 1982
- 6) 渋谷興平「大寺出羽遺跡」北総東部用水事業埋蔵文化財発掘調査団 1980
- 7) 西山太郎「御堂跡遺跡」「八日市場市史」八日市場市市史編纂室 1982
- 8) 渋谷興平「大寺遺跡」北総東部用水事業埋蔵文化財発掘調査団 1978
西山太郎「八日市場市史」八日市場市市史編纂室 1982
- 9) 渋谷興平「萱付遺跡」「妙名遺跡」北総東部用水事業埋蔵文化財発掘調査団 1976
- 10) 福岡 元「飯塚遺跡群」八日市場土地改良事務所・八日市場市教育委員会 1986
- 11) 高木博彦「八日市場市出土の千校尉と記された墨書き土器について」「史館」第12号史館同人 1980
- 12) 事業報告Ⅷ 一平成8年度一 (財)香取都市文化財センター 1998

第2図 遺構分布図ヒグリット名称(1/500)

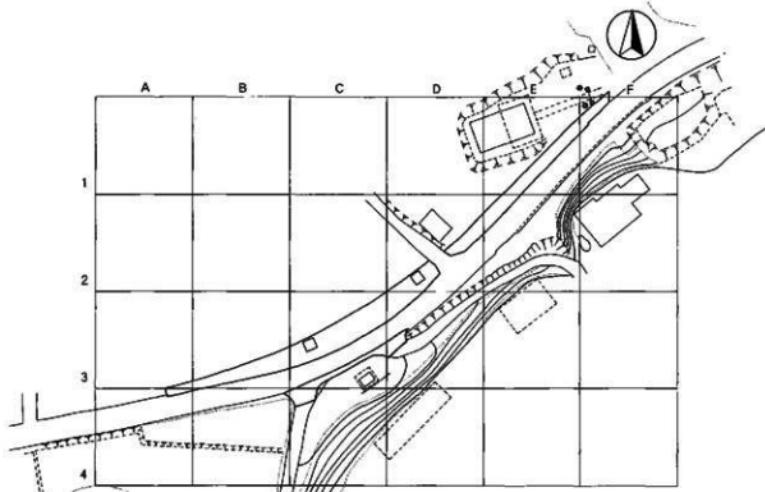


- 事業報告書 一平成9年度 (財)香取都市文化財センター 1999
 道澤 明「鷺ノ山横穴墓A群発掘調査報告書」鷺ノ山横穴墓群調査会 1991
 道澤 明「鷺ノ山横穴墓群」鷺ノ山横穴墓群調査会 1992
 13)「丸山横穴墓群現地説明会資料」(財)東総文化財センター 1994
 14) 土屋潤一郎「八日市場市吉田所在の須恵器窯について」『研究連絡誌』第3号 (財)千葉県文化財センター 1983
 15) 小久實隆史「八日市場市平木遺跡」(財)千葉県文化財センター 1988
 16) 西山太郎「老尾神社」「八日市場市史」八日市場市史編纂室 1982 ほか

第3節 調査の方法 (第2・3図)

山中遺跡は八日市場山田線の現道路の拡幅工事のために調査地は長さ200mにも及ぶ。調査地点は現道の両側にあり①地点は125m², ②地点は265m², ③地点は70m²の3か所に分かれている。

①地点は3か所の中では最も面積が広いため、確認トレンチによる調査を省き当初から表土を全面除去して遺構の所在の確認を行った。その結果、竪穴住居跡7軒、ピット群3か所、土坑2基が検出された。そのため全域本調査対象とした。②地点はトレンチを2か所設定した。トレンチ1からはピットが5基検出されたが、トレンチ北側は事業地外で、トレンチの外までは広がらないと推定できたので、拡張はしなかった。検出されたピットの周囲からは住居などの掘り込み遺構は確認できなかったため、ピット群として調査を実施した。トレンチ2からは遺構の検出はなかった。③地点はそのすべてが現道に当たり、①と②の確認調査の状況から、③地点は南側斜面部に該当しており、この部分に遺構は存在しないと推定されたため、本調査からは除外した。

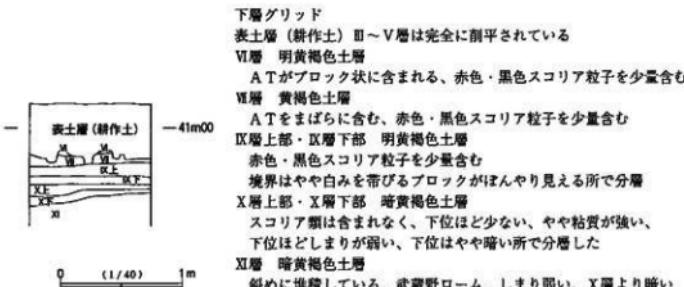


第3図 下層確認グリッド位置図

調査は、調査地全体を包括する大グリッドを設定し、さらに大グリッド内に小グリッドを設定する方法を取った。大グリッドは一辺20m×20mで、その中に一辺2m×2mの小グリッドを100個設定した。大グリッドの呼称については、北側から南側に向かって1～4、西側から東側に向かってA～Fとし、西北の大グリッドを1Aとした。小グリッドの呼称は北西隅を00、東南隅を99として、100個の小グリッドとした。

第4節 基本層序（第4図）

表土層（耕作土）には當時耕作する範囲とたまに深く掘り返す部分があり、山中遺跡ではこの両者は同一で、その直下はすぐにローム層になっている。遺構はこの表土層・耕作土を除去するとすぐに確認できた。また、機械による耕作痕が格子状に入っている、表土が浅いために竪穴住居跡によっては覆土の堆積状態の記録がとれないほどであった。また、竪穴住居跡のカマドも、耕作によって攪乱を受けており、遺存状態は全体に良くなかった。



第4図 下層土層柱状図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 概要（第2図）

今回の調査では、古墳時代の土壙1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡7軒、ピット群3か所、土坑1基が検出された。ピット群であるSH001以外は全て①地点からの検出であった。調査区は幅狭であったが竪穴住居跡は調査区に対して、横に並ぶ様な状態で検出され、一部に重複も見られた。3か所のピット群は竪穴住居跡とは重複しないで検出され、両者がお互いに存在を意識して構築されていたようにも伺える。

第2節 検出した遺構（第1表）

S I 0 0 1 (第5図、図版4)

3B-9を中心として検出された。住居跡の南側はSD001によって削平されており、住居の約3/4は欠損しており遺存していない。東側の壁部分ではSI002と重複する。SI002の床面が深く、SI002の覆土中にSI001の貼り床が確認できた。このことからSI002よりも新しく構築された住居跡と思われる。

東西長約4m、短軸は南側をSD001（現在の道路下）によって削平されており、残存部分は約1.1mだけである。深さは検出面から最大で0.35mを計る。覆土の遺存状態が悪く住居跡の土層界面は図示できなかった。カマドは北側壁のほぼ中央から検出され遺存状態はよかつたが、カマド内の焼土の堆積や火焼部の痕跡はあまり明確でなく、カマド内からの焼土層の検出も少なかった。柱穴は調査時には1本が確認されていたが、検討の結果SI002の柱穴と確認された。そのため、SI001に伴う柱穴は検出されなかった。遺物は2点が図示できた。

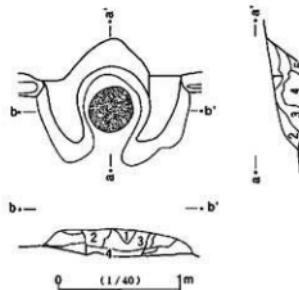
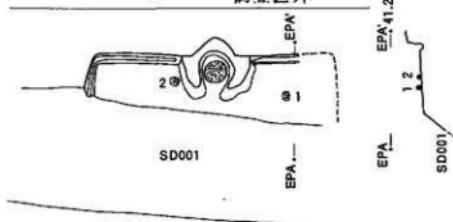
第1表 遺構一覧

遺構番号	時代	遺構種		規模(m)			
				南北	東西	深さ	
1	SI001	奈良・平安時代	竪穴住居跡	北側残存	1.1	4	0.35
2	SI002	奈良・平安時代	竪穴住居跡	北・南側を欠損	2.8	3.8	0.4
3	SI003	奈良・平安時代	竪穴住居跡	SI004と切り合う	1.4	1.3	0.2
4	SI004	奈良・平安時代	竪穴住居跡	SI003と切り合う	2.5	4	0.2
5	SI005	奈良・平安時代	竪穴住居跡	ほぼ全体依存	4.1	3.3	0.3
6	SI006	奈良・平安時代	竪穴住居跡	北側、カマドの一部欠く	3.4	3.8	0.2
7	SI007	奈良・平安時代	竪穴住居跡	コーナーの一部を欠く	3.8	3.8	0.1
8	SK001	古墳時代	土坑	2/3残存	0.9	1.3	0.06
9	SK002	時期不明	竪穴	一部、調査区外へ	1.7	0.9	1.5
10	SH001	奈良・平安時代		正確不明			
11	SH002 P1	奈良・平安時代		掘り込みしっかり、遺物有り	0.9	0.8	0.41
11	SH002 P2	奈良・平安時代		P1に同じ、遺物有り	0.8	0.7	0.32
11	SH002 P3	奈良・平安時代			1.15	0.75	0.27
11	SH002 P4	奈良・平安時代	掘立柱の当たり?	P1に同じ、遺物無し	0.9	0.6	0.34
11	SH002 P5	奈良・平安時代			1.0	0.8	0.29
11	SH002 P6	奈良・平安時代		P1に同じ、遺物有り	0.45	0.35	0.33
11	SH002 P7	奈良・平安時代			0.45	0.4	0.28
12	SH003	奈良・平安時代	竪穴住居跡?	柱穴			
13	SD001	近・現代	溝	現遺に関係する溝			

SI001

38-83

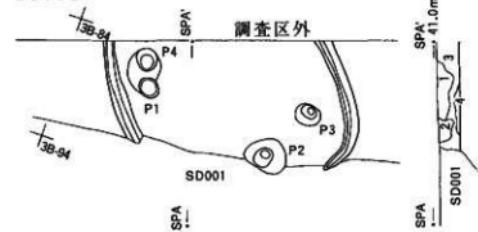
調査区外



SI002

38-84

調査区外



SI001

1. 棕褐色土層 焼土粒を微量含む しまりない
2. 暗褐色土層 明褐色土・黒色土を含む しまりない
3. 暗褐色土層 3cm程度の焼土ブロックを含む しまりない
4. 明褐色土層 下端に焼土がみられる

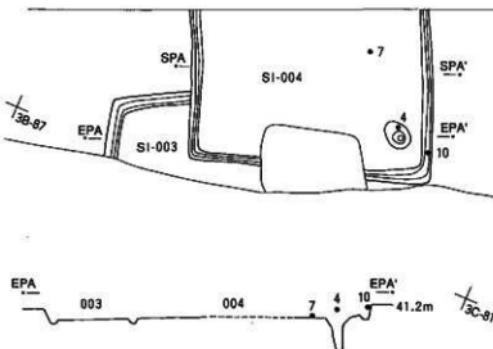
SI001 カマド

1. 暗褐色土 炭化粒を含む
2. 暗褐色土 焼土ブロックを含む
3. 明褐色土 焼土粒を多く含む
4. 棕褐色土 微量の焼土粒を含む

SI002

1. 暗褐色土層 ロームブロックと焼土を微量含む、しまりあり
2. 暗褐色土層 ロームブロックを含む、しまりない
3. 暗褐色土層 砂粒と2cm程のロームブロックを含む、しまりなし
4. 明褐色土層 全体に2~3cm程度のロームブロックを含む、しまりあり

SI003・SI004



1. 明黄褐色土層 ローム粒・砂少量を含む、しまりあり
2. 暗黄褐色土層 砂・焼土粒を少量含む、しまりある
3. 暗褐色土層 焼土粒・炭化粒を少量含む、ややしまりあり

0 (1/40) 2m

第5図 SI001・SI002・SI003・SI004

S I 0 0 2 (第5図, 図版4)

SI001と西側壁が重複して検出された。SI001はSI002の覆土中に床面を構築していた。竪穴住居跡の北側は事業地外となるため北側壁の検出はできなかった。一方、南側壁はSI001と同様にSD001によって削平されている。西側及び東側の壁は直線でなく若干曲線・弧をえがいている。東側の壁の南寄りのSD001に近い部分では西側に曲がる。一方、西側壁は全体に弧を描いている。東西3.8m, 残存している南北長2.8m, 検出面からの深さは東壁際で0.4mを計る。柱穴は全部で4本が確認されたがうち2本は連結しており、基本的には4本で、竪穴住居跡の立て替えが考えられる。カマドは調査範囲からは検出されなかった。遺物は1点が図示できた。

S I 0 0 3 (第5図, 図版5)

SI004と切り合っており、SI003が古い。南側はSD001によって削平されている。残存している東西長1.3m, 南北長1.4m, 検出面からの深さは0.2mを計る。床面のレベルはSI004とはほぼ同一レベルであった。東壁はSI004と重複している。従って西北のコーナー部分のみが残存している。周溝はしっかりとおり、検出した住居跡の残存部分からは検出されている。図示出来る遺物はなかった。

S I 0 0 4 (第5図, 図版5・6)

SI003と重複している。SI003よりも新しい。堀込みは浅く、ゴボウの耕作によって搅乱を受けていた。住居跡の北側は事業地外に統くため調査はできなかった。東西長4m, 残存している南北長2.5m, 検出面からの深さは約0.2mである。土層断面の観察によるとゴボウ堀りの農機具による搅乱が全面に見られる。東南隅に柱穴が1本検出された。カマドは検出されなかったが、西側壁際に焼土の散布が確認できたため、この位置にカマドがあると想定して、土層断面図用の土層ベルトを設定し、SPA'方向を煙道部の先端位置と仮定して調査を実施したが、カマドの痕跡は確認できなかった。住居跡内の覆土は3層が確認できた。遺物は6点が図示できた。

S I 0 0 5 (第6図, 図版6)

3B-85を中心として調査区の東側で検出された。耕作による搅乱が激しく、残存状態はよくない。南北長4.1m, 東西長3.3m, 確認面からの深さ約0.3mである。東側壁は搅乱が激しく、正確な壁の位置の把握はできなかった。カマドは北壁中央から検出されたが、耕作による搅乱が激しく残存状態は不良で、土層の図示は出来なかった。住居跡内の覆土は単純に2層が確認されたが、堆積状況等の詳細は不明であった。柱穴はP1, P2, P3, P4の4本が検出された。P1は2本が連結しているが、他の3本は単独の柱穴である。遺物は4点が図示できた。

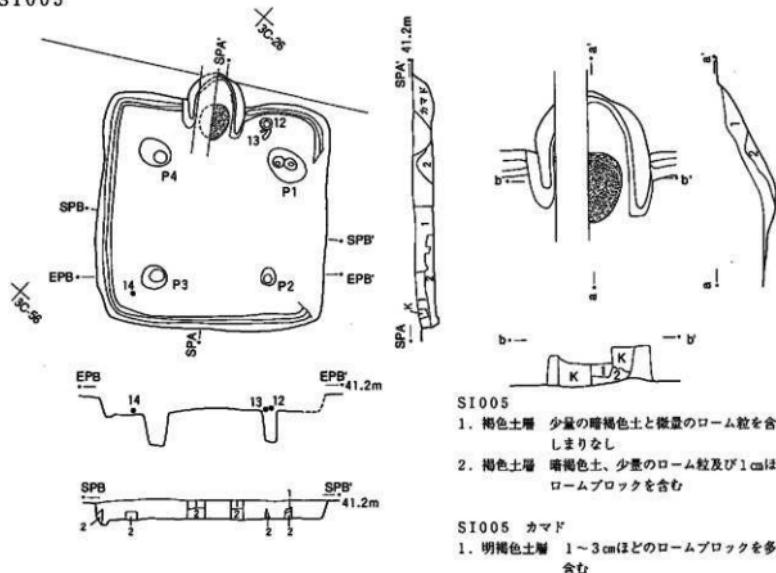
S I 0 0 6 (第6図, 図版7)

3D-02を中心として検出された。住居跡の堀込みは浅かった。南北長3.4m, 東西長3.8m, 検出面からの深さ約0.1m～0.2mを計り、横長の竪穴住居である。北側壁に焼土が散布しカマドと推定されたため、土層断面用ベルトを設定して調査を実施したが、残存状態が悪く、カマドとしての図示はできなかった。柱穴と思われるピットはP1, P2, P3, P4の4本が検出された。P1～2, 4は住居跡の壁際の角に位置している。遺物は1点が図示できた。

S I 0 0 7 (第6図, 図版7)

3C-29を中心として検出された。西北隅が事業地外に統き、全体は調査できなかった。他の遺構と同様に耕作による搅乱が激しく残存状態は不良であった。カマドは東側壁から検出された。堀込みも浅く、

SI005



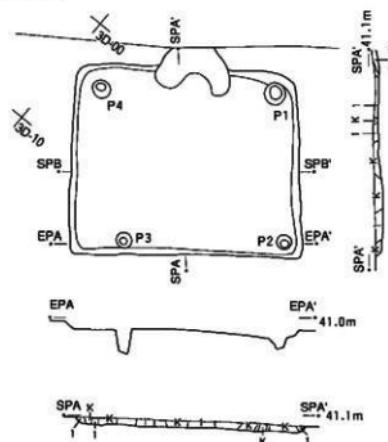
SI005

- 褐色土層 少量の暗褐色土と微量のローム粒を含む、しまりなし
- 褐色土層 暗褐色土、少量のローム粒及び1cmほどのロームブロックを含む

SI005 カマド

- 明褐色土層 1~3cmほどのロームブロックを多量に含む
- 褐色土層 1cmほどのロームブロックを少量含む

SI006



SI006

- 暗褐色土層 1~3cmほどのロームブロックを多量に含む、しまりなし

第6図 SI005・SI006・SI007

住居跡内の覆土の確認はできなかった。同様にカマドの残存も不良で、図示はできなかった。カマドの位置を基本として、東西3.8m、南北3.8mと推定され、検出面からの掘込みはわずかであった。柱穴は4本が検出された。P1, P2, P3, P4で柱穴の平面位置と住居跡の平面を比較するとややゆがんでいる。P3は深さ約0.4mであるが、他の柱穴は浅い。住居跡の堀込みが浅く住居跡の平面が若干ずれている可能性がある。カマドは、火焼部が残存していたが袖部などの痕跡は確認できなかった。遺物は1点が図示できた。

S K 0 0 1 (第7図、図版9)

B3-90を中心として検出された。北側の一部は事業地外に続き全形の調査は出来なかった。検出面からの堀込みは浅いが、土壤内の覆土は暗褐色土を主としてロームを含み、しまりのある覆土であった。東西長1.3m、残存南北長0.9m、検出面からの深さ6cmと浅い。覆土は暗褐色土でロームを含みしまりは普通である。土壤内から古墳時代後期の土器が1点出土した。

S K 0 0 2 (第7図、図版9)

3C-52から検出された。北側の上端は事業地外に続く。長軸1.7m、短軸上端0.9m、短軸底幅0.2m、検出面からの深さ1.5mである。南側の下端部は上端よりも外側に続きオーバーハング状を呈する。図示できる遺物はないが、古墳時代の土器片が出土しており、古墳時代の土壤と思われる。

S H 0 0 1 (第7図、図版8)

2E-02を中心としたトレンチ1のなかから5本の柱穴を検出した。住居跡の柱穴としては規則性がなく、また堀立柱建物跡としても規則性がみられない。東南側への広がりはSD002によって削平されている。

S H 0 0 2 (第7図、図版8)

3C-54を中心として、7基の柱穴を検出した。当初は堀立柱建物跡を想定して調査を実施したが、柱の並び及び柱穴の形態が一定していないため、ピット群として報告する。ピットは全部で7本が検出された。P6・7は細く浅い。P1は堀込みはしっかりしている。出土した遺物は全て小破片で図示はできなかった。長軸長0.9m、短軸長0.8m、深さ0.417mを計る。P2は堀込みはしっかりしている。長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.32mを計る。P3は長軸1.15m、短軸0.75m、深さ0.27mを計る。P4は底部に砂の堆積が見られ、堀立柱建物跡の柱の当たりと類似する。長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.34mを計る。P5は長軸1m、短軸0.8m、深さ0.285mを計る。P6は長軸0.45m、短軸0.35m、深さ0.33mを計る。P7は長軸0.45m、短軸0.4m、深さ0.277mを計る。全てではないが堀立柱建物の柱穴の可能性もある。

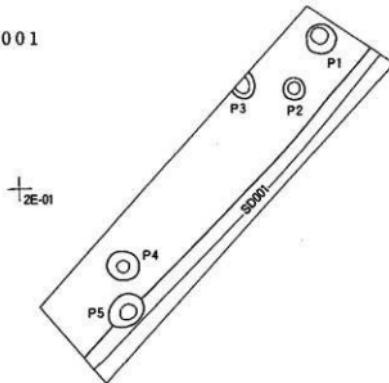
S H 0 0 3 (第2・7図、図版9)

3A-99及び3B-00から検出された。調査区外に続く竪穴住居の柱穴と思われる。2本の柱穴はそれぞれ別の構造の柱穴と推定されるが、SH003として報告する。両者の中間部にはSK001が検出された。P1は堀り込みはしっかりしている。覆土は暗黄褐色でロームを含み、覆土のしまりは普通である。P2は堀込みはしっかりしている。覆土は暗黄褐色土で、微量の炭化物を含む。覆土のしまりは普通である。

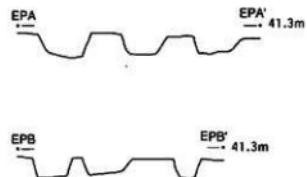
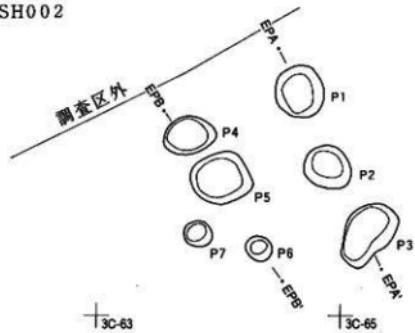
S D 0 0 1 (第2・7図、図版8)

幅狭の調査区の南側から、道路に沿って検出された。北側の堀込み位置は確認できたが、中心は道路上に続き、全形は不明である。溝の最深部は現道の下と推定される。このことから、道路をつくる時に掘削したのではなく、もともと所在していた道路に伴う溝と推定される。深さは完掘していないが確認できた部分で約0.7m以上あり、このことからも現道の下に最深部があるといえる。時期は不明。現道の

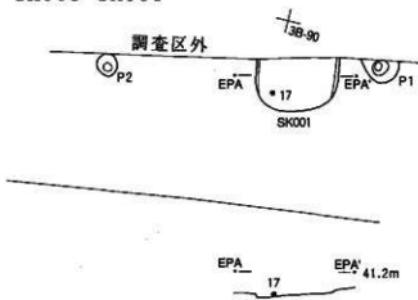
SH001



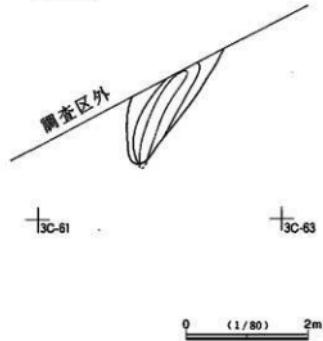
SH002



SH003・SK001



SK002



第7図 SH001・SH002・SH003・SK001・SK002

0 (1/80) 2m

下に続くために全掘はできなかった。

第3節 出土遺物（第8・9図、第2表、図版10・11）

SI001からは2点が図示できた。1は土師器の杯形土器である。口径12.4cm、底径8cm、器高4cmを計る。ロクロ成形の後に底部周囲に回転ヘラケズリを施す。胎土、焼成は良好である。2は須恵器の杯形土器である。口径14cm、底径8cm、器高4.7cmではほぼ完形に近い。ロクロ成形で、底部は手持ちヘラケズリを施している。内面底部に筆で書いた墨書が見られるが、文字ではなく記号様の墨書痕である。

SI002からは1点が図示できた。3は土師器の杯形土器で遺存状態は悪く、底部を欠損し、約20%が残存する。推定口径は14cm、残存高3.5cmを計る。胎土、焼成は良好である。ロクロ成形である。

SI004からは7点が図示できた。4は土師器の杯形土器で、50%が残存する。復元口径12cm、底径8cm、器高3.5cmを計る。ロクロ成形後に底部周囲に手持ちヘラケズリを施す。胎土は緻密で、焼成は良好である。底部外面に墨書が見られる。「真」の文字は丁寧に力強く書かれている。「真」の字と向きをほぼ逆さにして「蓮」の絵が描かれている。5は土師器の杯形土器である。約50%が残存する。ロクロ成形で底部は回転糸切り後にヘラ削りを施す。6は土師器の杯形土器である。約25%が残存する。ロクロ成形の後に手持ちヘラ削りを施す。7は土師器の杯形土器である。約70%が残存する。ロクロ成形、回転糸切りの後にヘラケズリを施す。8はロクロ成形の須恵器の杯形土器片である。9は土師器の壺形土器の胴部片である。復元胴最大径34.2cm、残存高は14.2cmである。外面はヘラナデを施すが、内外面ともに摩滅している。10は須恵器の壺形土器頸部片で、砥石に転用している。長軸5cm、短軸3.6cmを計る。

SI005からは4点が図示できた。11は土師器の杯形土器の底部片である。復元底径9cm、残存高1.6cmを計る。内外面に赤彩がほどこされている。12はカマドの東脇から出土した土師器の小型壺形土器で、胴部以下を欠損する。口径15.6cm、最大径15.6cm、残存高8.1cmを計る。外面はタテヘラケズリ、内面はナデを施す。

13はカマドの東脇から土師器の壺形土器の口縁部片である。口径21.1cm、残存高6.6cmを計る。内外面ともにナデを施す。14は今回の調査で出土した唯一の石製品である。材質は軽石で、周囲には擦痕の跡がある。

SI006からは1点が図示できた。15は土師器の高壺形土器の杯部片である。復元口径12cm、残存高3.4cmを計る。外面はヘラケズリ、内面は丁寧なミガキを施す。外面には赤彩が施され、内面は黒色処理が加えられている。

SI007からは2点が図示できた。16は土師器の杯形土器の底部片である。底部外面に判読不明の墨書がみられる。破片幅7cmである。ロクロ成形の後に底部周囲を手持ちヘラケズリによって整形している。20は鉄釘である。長さ3cmで短く、中央で曲がる。重さは4gを計る。

SK001からは1点が図示できた。17は土師器の杯形土器でほぼ完形である。口径13.8cm、器高5.3cmを計る。底部は丸底である。外面はヘラケズリ、内面はミガキを施している。外面に黒斑様の黒色部がある。

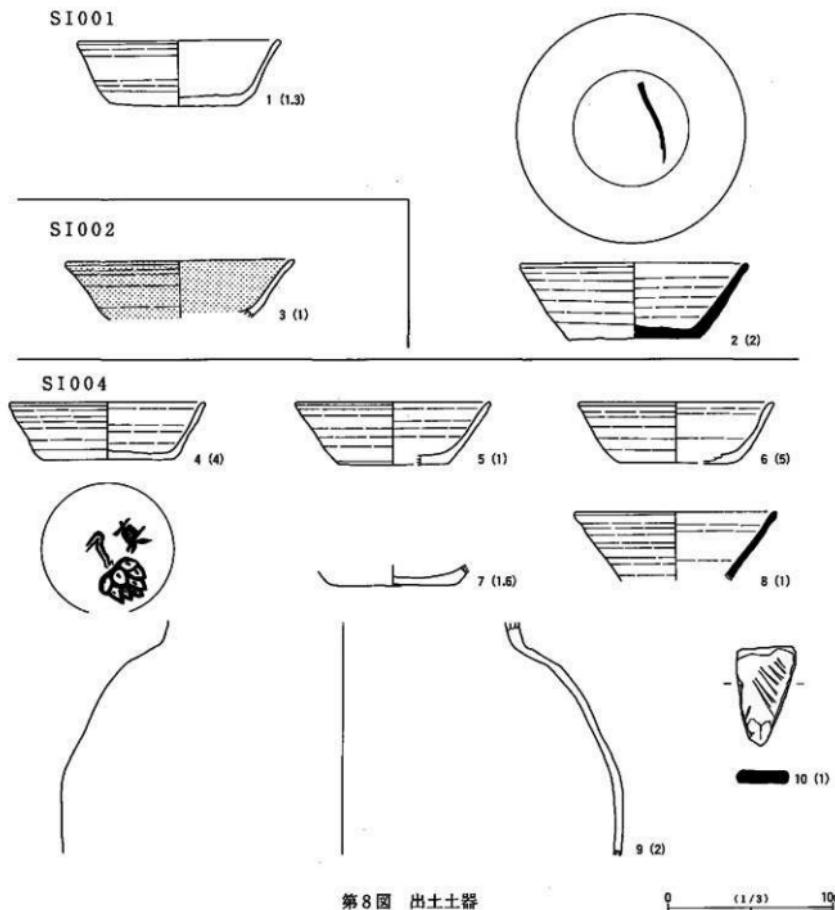
SK002からは図示できる遺物はないが、古墳時代の土器片が出土している。

SH002からは図示できる遺物はなかったが、鐵製品が一点図示できた。21は鉄釘で、長さ8.4cm、頭の幅1.2cm、重さ13.88gを計る。

SD001からは22の刀子が図示できた。長さ3.7cm、幅2.3cm、厚さ0.6mm、重さ3.51gを計る。

トレンチ 1 からは 1 点が図示できた。18は高壊脚部片で、残存高 5 cm である。脚部外面は縦方向のヘラケズリが加えられ、赤彩が施される。

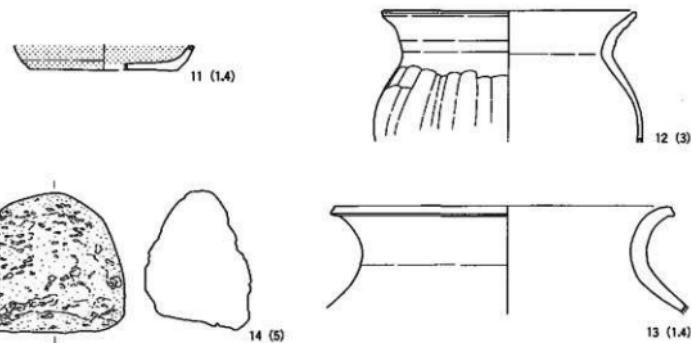
トレンチ 2 からは 1 点が図示できた。19は土師器の変形土器で胴以下を欠損する。復元口径 23cm、最大径 23cm、残存器高 6 cm を計る。外面はタテヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。内外面ともに摩滅しており、二次焼成を受けている。



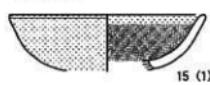
第 8 図 出土土器

0 (1/3) 10cm

SI005



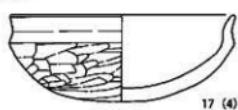
SI006



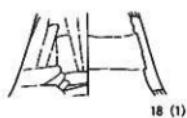
SI007



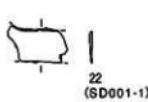
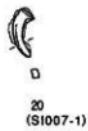
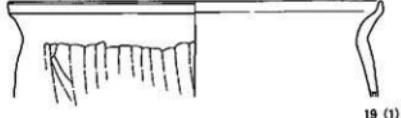
SK001



トレンチ1



トレンチ2



0 (1/3) 10cm

第9図 出土土器・石製品・鉄製品

第2表 山中遺跡出土土器觀察表

編 號	類 別	尖端 番号	直徑 番号	造物 番号	標 識	標 識	造形 %	外 面	內 面	色 調		燒 成	外 面	內 面	備 考
								口徑 長さ	底 長さ	底 大絶	底 底	高 度	高 度		
6 1	1	S1001	1.3	土師器	杯	75	12.4	8.0	4.0	10φ7/4	10φ7/4	織密	良好	ロクロ成形、底反 ヘタケズリ	内面無滑苔
9 20 1	1	S1007	1	石製品	針		長 3.0	幅 1.5	厚 0.6						直 4.06cm
8 2 2	2	S1001	2	須恵器	杯	85	14.0	8.0	4.7	10φ7/1	10φ7/1	織密	良好	ロクロ成形、手持 ちヘタケズリ	内面無滑苔
9 22 2	2	S1001	1	須恵器	刀子		長 3.7	幅 2.3	厚 0.4						直 3.516 重 13.86g
9 21 3	3	S1002	2	須恵器	針		長 8.4	幅 1.2	厚 0.75						
8 3 3	3	S1002	1	土師器	杯	20	14.0	—	(3.5)	7.5φ6/6	7.5φ6/6	織密	良好	ロクロ成形、底反 ヘタケズリ	内面無滑苔
8 4 4	4	S1004	4	土師器	杯	50	(12.0)	8.0	3.5	7.5φ6/6	7.5φ6/6	織密	良好	ロクロ成形、底反 ヘタケズリ	外面部無滑苔
8 5 5	5	S1004	1	土師器	杯	50	(12.0)	(6.6)	(3.8)	7.5φ7/4	7.5φ7/4	織密	良好	ロクロ成形、底反 ヘタケズリ	口凹無滑苔、ナガ
8 6 6	6	S1004	5	土師器	杯	25	(12.0)	(6.8)	(3.7)	7.5φ6/6	7.5φ6/6	織密	良好	ロクロ成形、手持 ちヘタケズリ	口凹無滑苔、ナガ
8 7 7	7	S1004	1.6	土師器	杯底部分	15	—	8.0	(1.3)	7.5φ6/1	7.5φ6/1	織密	良好	ロクロ成形、底反 ヘタケズリ	口凹無滑苔、ナガ
8 8 8	8	S1004	1	須恵器	杯	10	(12.4)	—	(4.2)	10φ7/6	10φ7/6	織密	良好	ロクロ成形	
8 9 9	9	S1004	2	土師器	變形杯	10	(34.2)	(14.2)	2.5φ5/8	5φ6/6	5φ6/6	織密	良好	底無	ヘラナダ
8 10 9	10	S1004	1	須恵器	底凹部分 (變形片)		長 5.0	短 3.6	(2.5)7/2	2.5φ7/2	2.5φ7/2	織密	良好	金屬製品と思ひ れられる滑苔	内面無滑苔
9 11 11	11	S1005	1.4	土師器	杯底部分	20		(9.0)	(1.6)	2.5φ7/8	2.5φ7/6	織密	良好	ロクロ成形、底反 ヘタケズリ	外面部無滑苔
9 12 12	12	S1005	3	土師器	小型壺口器	100	15.6	16.5	(6.1)	5φ6/4	5φ6/4	織密	良好	タチヘタケズリ	ナガ
9 13 13	13	S1005	1.4	土師器	壺口器	80	21.1		(6.6)	5φ6/8	5φ6/8	織密	良好	ナダ	
9 14 14	14	S1005	5	石製品	砾石(燧石)		長 8.6	幅 9.9	厚 6.5			織密	良好		直 167.6g
9 15 15	15	S1006	1	土師器	高环杯器	10	(12.0)	(3.4)	2.5φ6/6	2.5φ6/6	織密	良好	ロクロ成形、手持 ちヘタケズリ	外面部無滑苔、内面 色斑駁	
9 16 16	16	S1007	1	土師器	杯底器	10		(7.0)	(0.7)	7.5φ6/6	7.5φ6/6	織密	良好	ロクロ成形、手持 ちヘタケズリ	底部外側滑苔
9 17 17	17	S1001	4	土師器	杯	95	13.8		5.3	5φ7/4	5φ6/6	織密	良好	手柄ヘタケズリ	ニガキ
9 18 19	18	トランチ 1	1	土師器	高环脚器	10		(5.0)	7.5φ7/4	2.5φ4/6	織密	良好	タチヘタケズリ	外面部無滑苔	
9 19 20	19	トランチ 2	1	土師器	壺口器	20	(23.0)	(22.2)	(6.0)	7.5φ6/6	7.5φ6/6	織密	良好	タチヘタケズリ	ヘナダ 直 16.2cm 重 16.2g

第3章 まとめ

山中遺跡から出土した遺物には土師器、須恵器、鉄製品、石製品である。土師器で全形が伺えるものは杯形土器だけだ、成形、整形、調整痕から8世紀末から9世紀初頭のものと思われる。須恵器で図示できたものは2個体で、これも杯形土器である。須恵器の杯形土器は常陸產と思われ、土師器の杯形土器と比較するとやや古い傾向を示している。

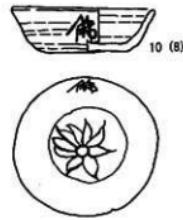
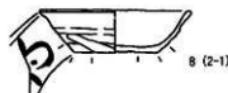
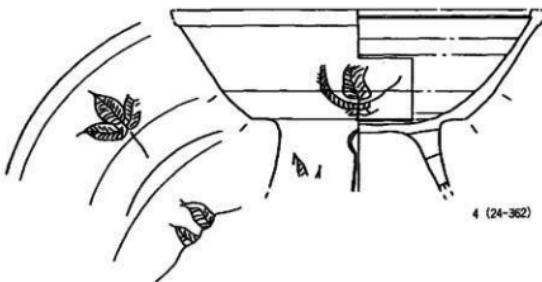
鉄製品は3点が出土した。うち2点は釘である。1はSI001から出土したもので、長さは短く、中程で曲がっている。2はSH002の柱穴から出土した。木質部等の付着はないが、大型の部類に属すると思われる。石製品としてSI005から軽石が出土している。やや大きめで、断面は三角形を呈する。表面は磨り減っている。用途は不明である。

墨書きは全部で3点が出土した(第8、9図)。2は須恵器の杯形土器で、墨書きは内面底部にある。文字ではなく記号と思われるが、細い筆では一直線に書かれている。1は土師器の杯形土器底部片の外側にある。文字の一部と推定されるが、内容は不明である。文字・漢字の下半部と思われる。

4の墨書きは、土師器の杯形土器の底部外面に描かれている。底部面と体部との境から若干内側に入った位置から上方に軸(茎)状の墨書きがあり、その上に蓮の花びらかあるいはつぼみと思われる花弁が8枚描かれている。これが「蓮」とすれば、花びらの内部に当時の古代瓦に見られる子葉部分が黒く墨で描かれている。この土師器底部外面にはほかに「真」の文字も書かれている。「蓮華」と思われる蓮の花びらと「真」の文字とはほぼ逆方向から描かれている。蓮華の細く伸びた部分を蓮の台座部とすると、真の字は上下逆となる。したがって、両者は別々に書かれたことがわかる。蓮華は丁寧に、写実的に描かれている。蓮華座の下には蓮池から伸びる蓮の茎が見られる。茎の下方先端は右側におれています。したがって、この墨書きは蓮池から伸びた蓮の花と見ることができよう。このように蓮茎(蓮脚、蓮華)と蓮の花びらが一体

第3表 「蓮」墨書き一覧 千葉県史ほか

No	遺跡名	県史掲載番号	文献				
1	八千代市 村上込の内	6-1 1-195	11 絵画	蓮	つぼみ	「来」	
2	八千代市 椿現後遺跡	6-3 3-153	3 戯画	蓮	花びら		
2	八千代市 椿現後遺跡	6-3 3-154	3 戯画	?	花びら		
2	八千代市 椿現後遺跡	6-3 3-132	3 戯画	蓮	花びら		
2	八千代市 椿現後遺跡	6-3 3-135	3 戯画	蓮	花びら		
3	八千代市 白幡前遺跡	6-7 7-393	4 絵画	蓮	つぼみ		
4	佐倉市 高岡大山遺跡	16-24 24-362	5 絵画	蓮	葉		
4	佐倉市 高岡大山遺跡	16-24 24-517	5 絵画	蓮	花びら		
5	成田市 六拾部遺跡	16-30 30-10	6 絵画	?	つぼみ		
6	成田市 戸崎IV遺跡	17-13 13-1	7 絵画	蓮	つぼみ		
7	成田市 外小代遺跡	17-14 14-15	8 絵画	蓮	つぼみ		
8	佐倉市 平賀惣行遺跡	23-2 2-1	9 絵画	?	つぼみ		
9	袖ヶ浦市 東郷台(川原井廃寺)遺跡	80-3 3-5	10 絵画	蓮	つぼみ		
10	白井市 南西ヶ作遺跡		1 絵画	蓮	花びら		
11	中国吉林省 吉林省舞踏塚墳圖						



第10図 墨書集成「蓮」「つばみ」

として描かれた墨書の類例は確認できなかった。しかし、絵画においては類例を見ることが出来る。法隆寺大宝藏院に安置されている阿弥陀三尊像がそれである。阿弥陀三尊像は光明皇后の母権夫人念持仏として古くから法隆寺に伝わるもので、飛鳥～奈良時代の作とされている。中尊は阿弥陀如来座像、左に勢至菩薩立像、右に觀世音菩薩立像がある。中尊は蓮池から伸びた蓮茎の上に蓮華があり、その上に座している。勢至菩薩像と觀世音菩薩立像は蓮華のうえに左右対象に立っている。

以上のことから、この絵画は「蓮華」を意図したものであり、仏前の蓮の花の供具で、蓮華の上には仏像が安置してあると考えるのが当然と思われる。

これらのことから、これが蓮の画であることは間違いないと思われる。そこで、千葉県史に集成されている墨書土器の中から山中遺跡から出土した「蓮」の絵に類似したものを抜き出すと、いくつかの類例があることがわかった（第10図、第3表）。村上込の内遺跡¹⁾から出土した杯形土器には蓮のつぼみが、権現後遺跡²⁾からは蓮の花びらが、白幡前遺跡³⁾、高岡大山遺跡⁴⁾、六拾部遺跡⁵⁾、戸崎IV遺跡⁶⁾、外小代遺跡⁷⁾、平賀惣行遺跡⁸⁾、川原井廃寺⁹⁾からは蓮のつぼみと思われる絵画が見られる。南西ヶ作遺跡¹⁰⁾からは蓮が咲いた状態で上方から見下ろした絵画がみられる。一方、日本以外では吉林省舞踏塚壁画¹¹⁾にはこの原型に近い絵画が見られる。

山中遺跡の南方約1.5kmには、大寺廃寺が所在している。周辺の邑からは大寺（廃）寺にかり出された村人が多くいたことが考えられる。村人はそこで、雑用に使役等に従事していた可能性もある。その際に大寺の建物内にある仏像や絵画などに接する機会があったことが考えられる。そこで目にした仏像や仏具、絵画を帰村した時に書き留めたとも考えられる。また、「真」はその村人の名前の一部かもしれない。あるいは、大寺（廃）寺に属する僧侶たちが近隣の村々での布教に携わっていたと考えられ、その際に村人の所有する器に絵画や名前の一部を描いたものかもしれない。「真」の字はその僧侶の名前の1文字で「真○」、「真如」などかもしれない。

いずれにせよ、発掘調査によって、集落内から「蓮」とその「台座」とも考えられる墨書が出土したことは、近くに寺院（大寺廃寺）があったとはい、一般の集落にも仏教の影響が及んでいたことが伺うことができ大変興味深い。「蓮」の描かれた土師器の杯形土器は8世紀の後半から9世紀初頭と考えられる。この頃、地方に於ける仏教思想の布教は多くの文献から伺うことができ、今回の墨書土器の出土はそれらを発掘資料からも示すことが出来たといえよう。

墨書参考文献

『千葉県の歴史 資料編 古代 県史13』 財団法人千葉県史料研究財團 1996

1)『村上込の内遺跡』『八千代市村上込の内遺跡』 (財)千葉県都市公社 1973

2)『八千代市権現後遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1984

『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1994

3)『八千代市白幡前遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1991

4)『高岡大山遺跡』『第2千歳サニータウン埋蔵文化財確認調査』 日本文化財研究所 1978

『高岡大山遺跡』『千葉県佐倉市高おか遺跡群Ⅱ・Ⅲ』 (財)印旛都市文化財センター 1993

5)『六拾部遺跡発掘調査報告書』 佐倉市教育委員会 1986

『佐倉市六拾部遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1994

- 6) 「戸崎IV」「公津原II」 (財) 千葉県文化財センター 1981
- 7) 「外小代」「公津原II」 (財) 千葉県文化財センター 1981
- 8) 「平賀惣行遺跡」『印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書』 (財) 印旛都市文化財センター 1994
- 9) 「東舞台遺跡－川原井廻寺跡－」 (財) 君津都市文化財センター 1986
- 10) 条川達行「印西市南西ヶ作遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XX－印西市西ヶ作遺跡・本埜村・武ト込遺跡－』 (財) 千葉県教育振興財団 2008
- 11) 吉林省舞蹈探壁画 千葉県教育文化財課植野英夫氏教示

写 真 図 版

図版1

周辺航空写真

図版2



図版 3

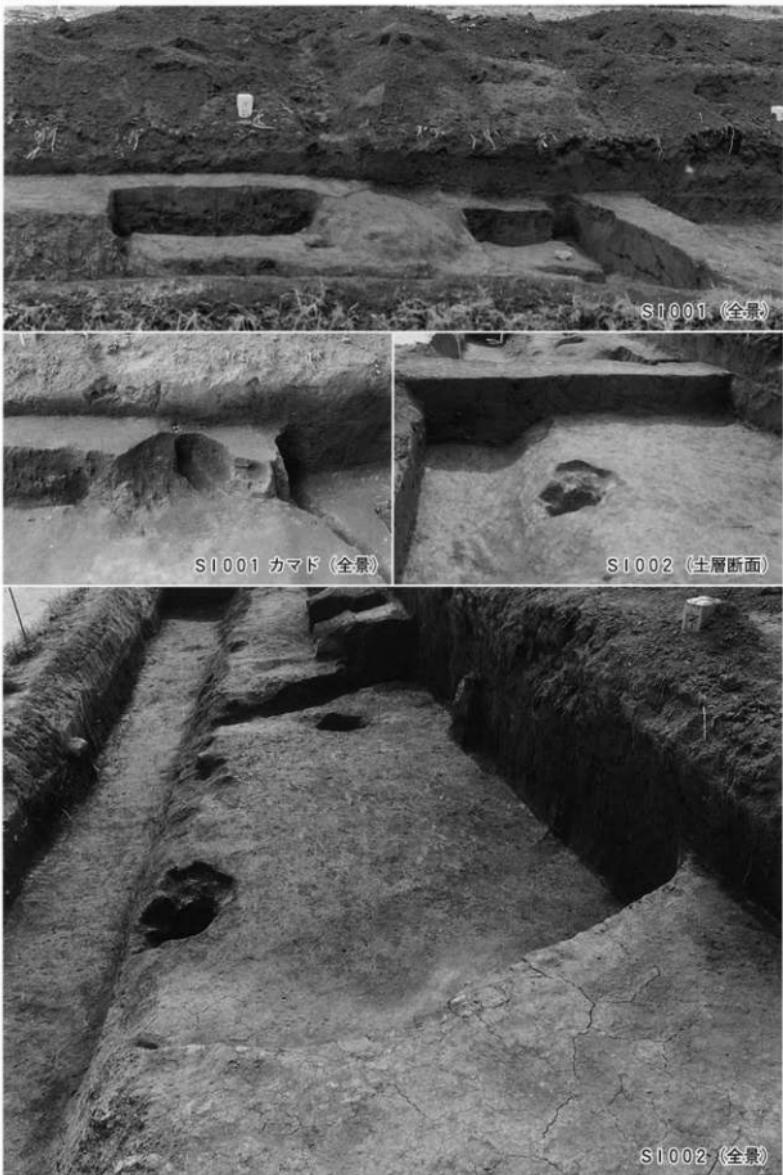


調査終了後（東側から）



調査終了後（西側から）

図版 4





図版 6



S1004 (遺物出土状況)



S1005 (全景)



S1005 カマド (全景)

図版 7



S1006 (全景)



S1007 (全景)

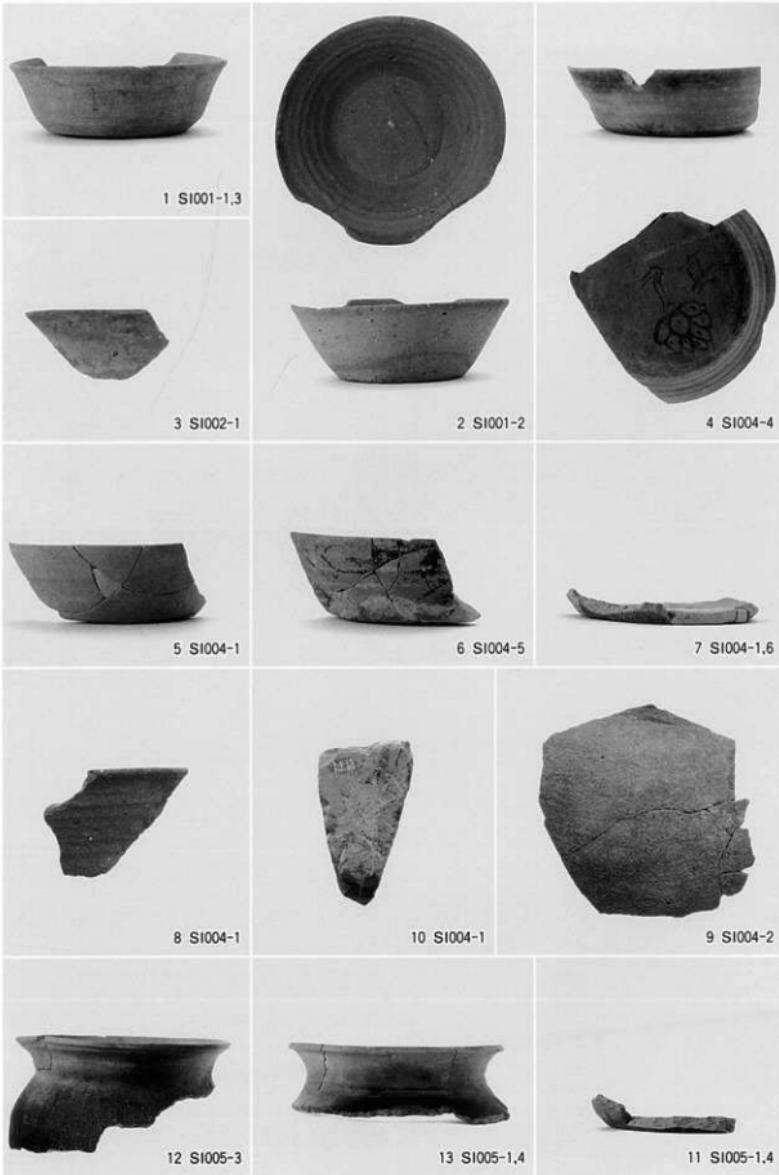
図版 8



図版 9

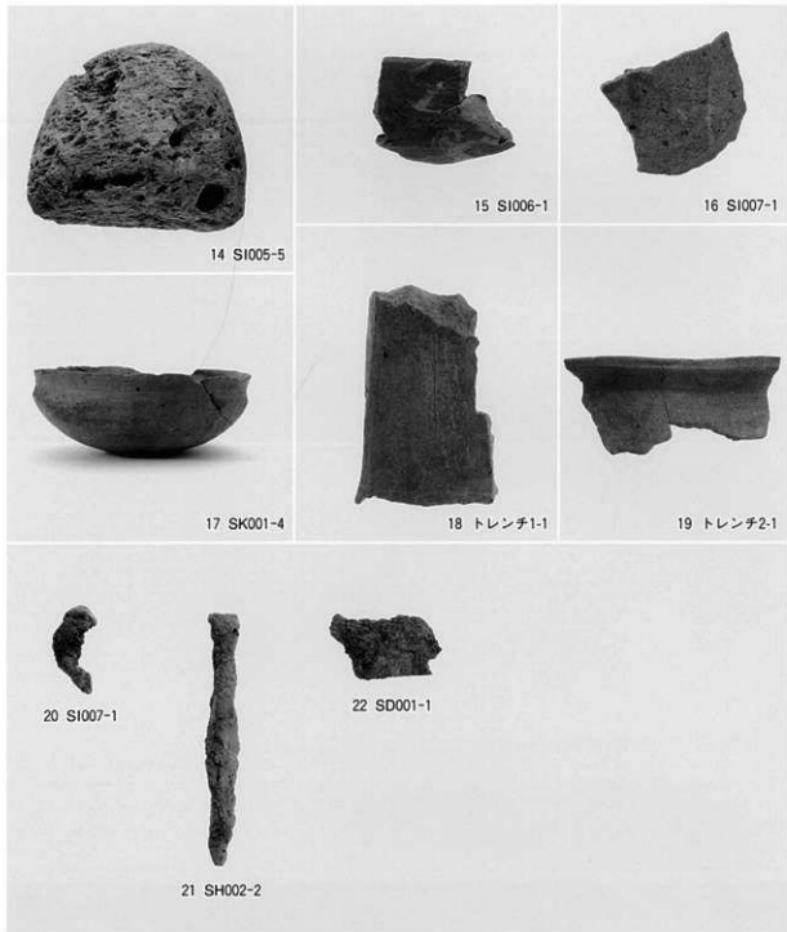


図版10



出土遺物 (1)

図版11



出土遺物 (2)

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第640集

山 中 遺 跡
— 地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書 —

平成22年2月25日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 千葉県 県土整備部
千葉市中央区市場町1-1-1

財団法人 千葉県教育振興財団
千葉市美浜区鷺浦809番地の2

印 刷 有限会社 菅 谷 印 刷
千葉県香取市羽根川309-1
